

清沢が最晩年を過ごした西方寺(愛知県碧南市)の和室

有限を伴として率ゐる主人公なり。こうした「法話」が『反省雑誌』の読者にどれだけ響いただろうか。極楽浄土を願う門徒たちには、ちよつと難解すぎる、と思われたかもしれない。とはいえ、清沢がこうした西洋哲学の言葉で仏教を捉え直したからこそ、「仏教の近代化」は進んだ

を得るにいたる」と評した体質が浮

するため数え十六歳で得度、東大でフェノロサに学び、「ヘーゲル哲学のわが国におけるもっとも早い批判的撰取者」(橋本)となった「異常なほどの秀才」(司馬)である。となれば、もともとキリスト教に対抗し、禁酒進徳を実践して仏教改革を進める「反省会」の機関誌として明治二十(一八八七)年に生まれた『反省会雑誌』(明治二十五年に『反省雑誌』、同三十二年に『中央公論』と改称)に登場してくるのは、自然な成り行きだったのだろう。



清沢満之
(1863~1903)

かび上がってきて、なかなか面白い。「疑を質す」で清沢は、反省会は「禁酒進徳」というのに「節酒」もあるのはなぜか、と問い質している。ここでは「反省」という言葉に着目、その読み方が「反り省みる」なのか、「反し省みる」なのか、それとも「反し省く」か、あるいは「反対に省みる」なのかと問う。詳細は割愛するが、それぞれを検討し、「反対に省みる」と読むなら、禁酒ばかり

のであった。

花田の精神主義批判

ただ、『反省雑誌』に見える清沢を巡る思想展開は、これで終わりはなかった。『中央公論』に改称した後の明治三十五(一九〇二)年の二月号と四月号に、真宗本願寺派(本山・西本願寺)の仏教学者・花田衆甫が「精神主義」と題する評論を発表する。そこで花田は、晩年の清沢とその門人が展開したとされる「精神主義」を厳しく批判した。清沢らの精神主義とは、自分の精神内に充分な満足を求め、交際協和して人生の幸福を増進し、絶対無限者によって完全な立脚地の獲得を目指す運動とされる。清沢の到達点ともいわれ、明治後期の精神界に大きな影響を与えた思想である。その精神主義を、本願寺派ながら同じ浄土真宗

に偏ることを「反対に省みて」、禁酒ばかりが我々の主義ではないと考へ直し、人によってはまず節酒が必要になるとし、反省会がなぜ節酒を認めるのか、疑いが晴れるとする。いかにも「理詰め」の体質が表れているように。

三〇五月号の「法話」では、清沢が哲学上の重要テーマとした「有限と無限との関係」を論じている。前年に刊行した『宗教哲学骸骨』で「宗教の要点は、無限力の活動によって有限が無限に進化することにある。これを有限のほうから言えば、有限が開発して無限に進達するところにある」などと論じていただけに、「法話」もまた「理詰め」だ。いわく、「人は是れ有限の身にして、亦無限の一部なり、有限あれば必ず無限あり、有限即無限にして無限の中には我々を漏らさず、無限は一切の

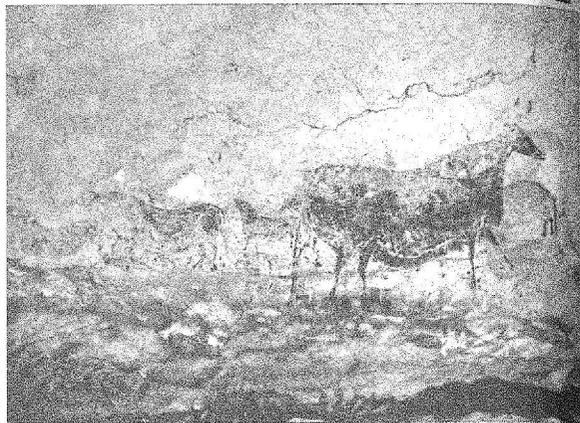
の学者が糾弾したのだ。

花田の批判はこうだ。精神主義を唱道する機関誌『精神界』は「精神主義は酒を好む者に酒を止めよと云ふにあらず……偷盗を好む者に偷盗を為すべからずと命ずるにあらず……殺生を好む者に殺生を避けよと強ゆるにあらず」などと記しているが、罪悪は罪悪のまま悔い改めず、安慰を得るのが自然だというなら、このような自然で社会人倫を支配するのはいかなる者か、と。つまり、精神主義は倫理的に無責任だと糾したのである。

実はこの指摘は、現在まで続く議論を内包している。花田が批判した精神主義は、「哲学」よりも阿弥陀仏の「恩寵」を強調した結果、倫理が脱落した主張のようにも見えるが、このような主義が本当に清沢本人の思想なのか、という議論である。こ

文◎安村敏信 美術師歴
Yasumura Toshinobu

特別展 『世界遺産 ラスコー展 ~クロマニヨン人が残した洞窟壁画~』



再現された「身廊」の壁画「黒い牝ウシ」
©SPL Lascaux international exhibition

フランスのラスコー洞窟壁画は今から二万年頃に描かれたものとして学校で習った記憶がある。日本の縄文時代が一万六〇〇〇年前頃からだとすれば、それを遡ることさらに四〇

〇〇年。気の遠くなるほどの昔だ。そんな頃に、今見ても生動感あふれるウシなどの動物が描かれている。一度は見てみたいものだが、一体、ラスコー洞窟のあるドルドーニュ県とは何処だ

らう、という人のためにお薦めするのが本展だ。本展のメインは何といっても最新テクノロジを駆使して復元された壁画群である。実物大で作られたその壁画の部屋に急いで行ってみると真っ暗だ。しばらくすると青いライトが線刻を浮かび上がらせ、やがて壁面全体にライトがあたり、彩色された動物たちが見えてくる。まるで洞窟に入ったかのようだ。

この疑似体験は、二つの疑問をもたらす。こんな真っ暗な空間にどうやって描いたのか。何のために描いたのか。展覧会はこうした疑問に答える構成になっており、石器やランプなどの実物資料も展示される。また、これを描いたクロマニヨン人の文化についても紹

介している。さらに、同時代の日本列島はどうだったかが最終コーナーで語られる。何といっても感動するのは迫真的な動物たちの姿だ。『黒い牝ウシ』の腹部のふくらみの重量感。足元のツメが割れているところの描写。二万年前にしてこの表現力は何だろう。暗闇の中で制作された線刻と彩色による動物表現の極み。まさに人類が描くことの原点を見た気がした。とはいえ、何のために描かれたかは謎のままだ。

フ

ランスのラスコー洞窟壁画は今から二万年頃に描かれたものとして学校で習った記憶がある。

〇〇年。気の遠くなるほどの昔だ。そんな頃に、今見ても生動感あふれるウシなどの動物が描かれている。

この疑似体験は、二つの疑問をもたらす。こんな真っ暗な空間にどうやって描いたのか。何のために描いたのか。展覧会はこうした疑問に答える構成になっており、石器やランプなどの実物資料も展示される。また、これを描いたクロマニヨン人の文化についても紹

介している。さらに、同時代の日本列島はどうだったかが最終コーナーで語られる。何といっても感動するのは迫真的な動物たちの姿だ。『黒い牝ウシ』の腹部のふくらみの重量感。足元のツメが割れているところの描写。二万年前にしてこの表現力は何だろう。暗闇の中で制作された線刻と彩色による動物表現の極み。まさに人類が描くことの原点を見た気がした。とはいえ、何のために描かれたかは謎のままだ。

の点について、山本伸裕氏は二〇〇一年に『精神主義』は誰の思想か（法蔵館）を刊行し、『精神界』に発表された論文のかなりの部分が梶鳥敏ら門人たちの手で清沢の点検を経ずに書かれていたことを論証、仏教学者の末木文美士氏によれば、清沢研究者に大きな衝撃を与えたという。何でも容認してしまいう精神主義はその後、戦争をおおる際にも利用されたが、『精神界』の文章のかなりの部分が門人たちによる勝手な執筆であるなら、清沢本人の責任は軽減されることにもなり得るからだ。

いずれにしても、「清沢の精神主義は、西洋哲学を早い時期に『脱構築』した試みとしてなお価値が高い」と末木氏が語るように、明治後期に花開いたこの運動は、宗教と哲学、宗教と倫理の関係をどう考えるかという、重要なテーマを現代に提

供している。『宗教』から『武士道』へ
ところで、明治時代の『中央公論』の目次に再び目を向けると、一つの傾向が見えてくる。精神主義が唱道されていた明治三十年代、同誌は、その成り立ちからして当然だが、「宗教」を重要な柱としていた。花田の「精神主義」も毎月掲載される宗教評論の一つだった。だが、日露戦争が近づくにつれ、この雑誌から「宗教」の項目が徐々に減少し、後景に退いていくことが見て取れるのだ。代わって開戦とともに頻出してくるのが「武士道」という言葉。